

第六章 渡辺プロ歳時記

竹村健一さんが著書『チャンスは友が運んでくる』のなかで、渡辺プロ新年会と電通主催の新年パーティを、「日本の二大パーティ」と書かれ、「芸能プロダクションの新年会が、巨大広告代理店と肩を並べていたという事実は、ひとえに渡辺さんの人物の大きさ、幅の広さを物語っている」とコメントされているのに、私も全面的に同感です。あえて付け加えるなら、渡辺夫妻の魅力が政財界の大物たちを嬉々として参加させた、ということでしょう。

この夫妻がなさった催しは、不思議に決まるんです。サマになるといふのかな。だからVIPも安心して参加できる。軽井沢のゴルフ大会などは、いまふうというサミットみたいなのでした。もし、あそこにサリンを撒かれたら日本は潰れてしまう。

渡辺プロが、あの多くの催しをつづけたのは、決して晋さんや美佐さんの見栄からなどではなかった。これは断言できます。たんなる見栄なら、ぼくは協力しなかったでしょう。あの根底には、芸能文化に対して社会一般の認識を深めてもらうという、渡辺夫妻の一貫した「志」があったんです。私利私欲を離れた気持ちで、政・財・官の各界の人たちに通じたのですよ。

音楽事業者協会の法人化や、ここを通じた芸能界向上のためのいろんな陳情がスムーズに運んだのも、その意図するところを官僚がよく理解していたからです。渡辺プロのやった催しは、広く芸能界のために有効なポイントをあげたんです。目先の利害だけを見ていた人には、あの催しの意味はわからなかったでしょうね。

高橋圭三（前・参議院議員、高橋圭三プロダクション社長）談

この章は、渡辺プロ・グループ四〇年史のいわば「間奏曲」として置かれる。

かつて渡辺プロは、じつに多くの催事を持っていた。なかには渡辺プロの催事でありながらも、業界規模の名物行事になったものまである。

外部の人は、渡辺プロの名とともに、これらの諸催事を、繚乱の花園のように思い出すかもしれない。社内では、老優が往時の檜舞台を回想するように、血潮をたぎらせる人がいるだろう。いっぽうには、これらのことどもを伝説として、僅かに聴き知っている程度の若い人もいる。

なつかしい追憶や、伝説に対する好奇心から読まれても自由である。ただ、以下のことは理解してもらわなければならない。

これら諸催事は、押しなべて言うところ渡辺プロが築きあげた、企業体としての文化の総和であった。渡辺プロの会員によって共有された行動様式であり、同時に組織的な学習の機会でもあった。そして、催事という条件と環境のなかで、彼らは渡辺プロ独自の情緒的反応や習慣的行動を獲得した。その文化は、いまも渡辺プロ・グループの血脈を流れている。

催事には、儀式的側面がつきまとい、それは渡辺プロの催事にも痕跡が窺える。大学体育部の猛者から挫折した左翼学生まで、一癖も二癖もある若者が揃っていた。松井ビルの時代、極端に言えば二四時間勤務だったから、寸暇を盗んで雀卓を囲むことくらいは大目にもみられていた。あるとき、井澤健が同じ雀卓を囲んだ後輩マネージャーに仕事上の注意を大声で与えている最中、血圧があがりすぎて倒れ救急車で病院に担ぎ込まれた。松井ビルのエレベーターは狭く、担架が入らない。階段をゆっくり下りた。仕事で日劇にいた和久井保が、急をきいて飛んで帰った。やっと救急車にいれられようとしている井澤をみて、和久井は言った。「なんだ、生きてるじゃないか」。断るまでもなく、安堵のあまりの悪たれ口である。

晋はこんな悪童たちを心から愛していたが、同時に彼らの絶大なパワーを損ねることなく、再学習させる必要性も感じていた。『躰』と言い換えてもいいだろう。その具体化が幾多の催事となって実現する。

それらの催事を歳時記ふうに綴ってみる。

新年

くつきりとした四季の移り変わりは、日本人に与えられた恵みのひとつだろう。社長邸の機能は年間を通じて変わらなかった。多くの来客や社員たちに開放されて、激しく議論が飛び交っている。お手伝いさん四人が、二四時間ぶっ通しで来客をフォローする。一九七一年（昭和四六）年に上大崎から広尾に移転しても、社長邸のこの風景はつづいた。それでも元日から三日までは、気分が改まってしまう。

タレントや社員たちが三々五々、お年始に回って来るのである。正装に身を固めて「おめでとございます」と、礼を交わしているうちに、新しい年への意欲が湧いてくる。

例年二日には午後七時から、社長邸で「松の内おたのしみ映画会」が催された。その内容は、美佐の名前で前年に送られた案内状で明らかだろう。ここにあげるのは七九年のものである。

松の内おたのしみ映画会ご案内

男はつらいよ第二作『寅次郎わが道をゆく』

寒気日増しにきびしく、今年もほんとうに残り少なくなりました。

お忙しい毎日をお過ごしのことと存じます。

明けてお正月早々、例年通り寅さん映画を楽しみたいと思います。

このシリーズその他で昭和五三年度中に第一回日本映画アカデミー賞の監督賞、作品賞、脚本賞その他数々の賞を独占された山田洋次監督から、いろいろ楽しい裏話など聞けると思います。この映画のアドナ役は、木の实ナナちゃんです。来年こそ寅さんのように、明るくのびやかに生きたいものです。

今回はハナちゃんが御園座でお仕事ですので、谷啓さんが皆様への「サービス始め」として映写技師を担当して下さいます。万障お繰り合わせしてお越しをお待ち致しております。

山田洋次監督と、彼の人気シリーズ「男はつらいよ」の最新作映写をメインに、めでたい一宵を過ごそうという趣旨だ。案内状の文面にもあるように、映写技師は原則としてハナ肇がつとめた。これが大変な役なのである。

招待された客は大広間に集まり、ガラス越しに庭園に張られたスクリーンを見る。映写機も庭にセッティングされているので、映写技師は防寒具をまもってフィルム巻数のチェンジをしなければならない。それをハナは、山田監督に対する敬意から進んでやった。六四年の『馬鹿まるだし』からはじまった山田とハナのコンビ映画は、六六年の『なつかしい風来坊』で、ハナにブルー・リボン主演男優賞を獲得させている。

広尾に移って間もなく、年始客へのサービスとしてはじめたのが恒例になった。松竹の脇田茂プロデューサーの好意による。招待客は政財界人、放送、映画関係者、渡辺プロ・グループのタレントたち約八〇人で、たまたま居合わせた客や社員もまぎれ込む。大受けする場面があると、ハナが庭先から顔を突き出して、「ね、おもしろいでしょ」と、わがことのように得意がってみせた。この場の雰囲気をよく伝えるエピソードだ。主役とも



渡辺邸での正月風景

いすべき山田監督は、端の方にポツンと座っていた。そんな控え目な人柄が、渡邊夫妻の心をいっそう強く惹きつけたらしい。

渡辺プロ・グループの「仕事始め」は一月四日。もちろん人気タレントやそのマネージャーたちには、暮も正月もないが、このような現場を除くと、四日午前十一時に全社員とタレントが、有楽町のメイッツに集合する。当初は「渡辺プロ・グループ新年名刺交換会」といった。紺野総務課長（当時）の司会で、社長の年頭の辞、タレント代表の挨拶、各グループ代表者の挨拶とつづき、新人タレントの紹介をして三本締めで終わる。創業二〇年を迎えた七五年には、系列一社、関連四社を含め一五〇人が集まった。そのときの晋社長は挨拶が残っている。

私は新年に当たって、渡辺グループ全体の計はなんであるかを考えてみました。悪性インフレ、不況の嵐のうちに明けた新年ですが、今年も同じような、激動と混乱の年であることは、まぬがれないことでしょう。だからといって、手をくわえて嵐の去るのを待っていたのでは、現代人として失格です。

渡辺グループは創業以来二〇年。努力の積み重ねによって生まれ、経験と実績に裏付けされた不動のポリシーと自信を持っています。激動、混乱の中で自分を見直し、自己をきたえ、そして立ち上がる……。こういうたくましい社員力が、渡辺グループ二〇年の実績の上に積み重ねられ、長年の夢を開いて実を結ぶものではないでしょうか。

ちなみに、この年は十二支のうさぎ年であり、晋は年男だった。「私もピョンピョンはねます」と言って、皆を笑わせている。前年は森進一「襟裳岬」が第一六回レコード大賞

グランプリ、木の実ナナがミュージカル『屋根の上のヴァイオリン弾き』で第二二回ゴールデナロー賞新人賞、萩原健一が映画『青春の蹉跎』でゴールデナロー賞グランプリ、梓みちよが「二人でお酒を」でゴールデナロー賞音楽賞を獲得しているのに、それはすでに過去のこととして一言も触れていないのが、渡辺プロの姿勢を示している。

名刺交換会は、やがて場所を青山の東京音楽学院に移してつづけられ、プロ、出版、映画のソフト関連会社に絞って、「仕事始め」と簡略に呼ばれた。会長、グループ代表の挨拶、これから展開するタレントや作品を紹介してゆく順序は変わらない。

そして一月七日（日曜日の年は八日）の「渡辺プロ新年会」がやってくる。外部に向けた年初の大作である。今年もよろしく、という意味合いをこめただけのものだが、来賓の多様さ、趣向の警拔さ、抽籤（福引き）景品の豪華さ、そして細心のサービスで、業界を代表するパーティとなった。「渡辺プロのパーティに呼ばれなければ業界人にあらず」とまで、ある外部の人が言った、という。これが回りまわって晋の耳にはいったとき、「そんな言葉にのぼせてはいかん。会場の広さには限度がある。知らずに失礼をしている相手がいるかもしれないじゃないか」と、むしろ不機嫌な表情になった。

第一回は六五年。プロ創設一〇周年のときで、場所は溜池の東京ヒルトン・ホテルだった。会場が手狭で、すぐ芝の東京プリンス・ホテルの八〇〇人収容プロビデンス・ホールに移したが、それでも足りず、やがて一五〇〇人を収容できる同ホテル鳳凰の間に。例年、午後四時からじまった。総合司会は高橋圭三がつとめてくれた。おおまかな順序を追ってみる。三時三〇分に受け付けが開始され、入り口で抽籤券を配布。三時五五分、バンド演奏とともに来賓が入場する。四時二〇分、司会者が開会の辞を述べ、グループの系列会社を紹介してゆく。その間にタレントが整列して『年のはじめ』の大合唱。ついで晋の



新年映画会



新年会お出迎え



新年会（女性タレントたちの来賓お出迎え）

年頭の辞、来賓代表の祝辞、晋・美佐、タレントによる鏡開き、来賓の音頭で乾盃となる。五時から新人紹介を含むショータイム、五時三〇分に美佐の挨拶があつて、五時三五分から福引き。「当たった」「はずれた」の歓声と溜め息の裡に司会者が閉会を告げる。

政界の来賓では佐藤栄作、中曽根康弘、宇野宗佑、羽田孜など総理経験者から、桜内義雄、森喜朗、相沢英之、藤波孝生、河野洋平、越智通雄といった議長、大臣経験者が多く、気軽に参加した。出席はしなかったが、福田赳夫からパーティ会場に祝電が舞い込んだこともある。七六年のことで、田中内閣のあとを受けて成立した三木内閣がぐらつきはじめていた。同年暮、福田内閣は発足している。

晋・美佐の政界との交遊は、特定の立場や派閥にこだわらず、「志」の感じられる人を大切にしたい。選挙応援にタレントを出したり、晋がバンドを率いて政見発表会の堅苦しい空気をほぐしたこともある。あるときは候補者の子息（小学生）を演壇に立たせるような演出で、対立候補を唸らせた。日頃の仲間に対する肩入れの一種なのである。

新年会に集まってくる財界人グループは、もっと日常的な仲間だった。前記、五島昇を中心にした「テンテン会」の発展した組織として「経済社会研究会」があり、晋もこのメンバーになっていた。盛田昭夫（ソニー）を先頭に、五〇音順でいえば石井久（立花証券）、稲盛和夫（京セラ）、石塚庸三（パイオニア）、牛尾治朗（ウシオ）、江頭匡一（ロイヤル）、大沼淳（文化服装学院）、佐治敬三（サントリ）、四島司（福岡相互）、鈴木義雄（鈴屋）、塚本幸一（ワコール）、堤清二（西武百貨店）、堤義明（西武鉄道）、坪井一郎（トリオ）、野口英史（山梨放送）、松園尚巳（ヤクルト）、梁瀬次郎（ヤナセ）、山口比呂志（雑誌「財界」）、山田稔（ダイキン）、そして晋と、働きざかりのオーナーが名を連ねた。

政・財界人と晋たちの交遊については、「歌う会」のところで改めて述べる。ここでは新年会の顔触れを確認しておこう。当然のことながら、出席者の大半を占めるのは業界関



鏡開き



壇上ご挨拶（夫妻とタレントたち）

係者だ。レコード会社のパーティなどは同業他社を招かないが、渡辺プロはOBも含めて、同業者をおおいに歓迎した。テレビ、映画、レコード、そして音楽出版社。それも現場を重視した人選である。招待客にとってはこの四時間、この会場をこまめに歩いているだけで、必要な賀詞の交換を一举に果たすことができた。便利なこと、この上もない。

招待客の便利さと主催者の気配りは正比例する。前日の午後八時から舞台の仕込みがはじまる。基礎ステージ、ステージ正面と両サイドの階段、バンド台、照明台、タイトル・パネル、十二支の張り子、書き割り、模擬店の造りもの、各種提灯や電球、抽籤用のパネルとステージ、各種表示の看板や旗。当日は午前九時から機材や賞品の搬入があり、正午に全社員が集合する。一二時三〇分からショー関係の音合わせ、一時半からタレントのリハーサル。三時に全員が各自着用する揃いの法被を確認して、テーブルのスタンバイをホテル側に委ねる。

スタッフは表方と裏方にわかれ、裏方のほうを本部と呼んだ。八三年の一覧表には本部に一三名、さらに秘書課、弁当係、電話受付係、輸送係の四名が本部に配属された。表方は会場関係で受付係、報道係、来賓接客係、進行係、タレント係、パーティ進行係の計一一九名となっている。いちばん末尾に「後始末係 全社員」と記されているのが、いかにも渡辺プロらしい。

会場がもつとも盛り上るのは、福引きのときだった。宝くじでお馴染みの矢車方式の抽籤器が三台、セリ台に置かれ、七四年の場合でいえば天地真理、アグネス・チャン、千葉絃子が射手になった。当たり番号の掲示は藍美代子、賞品の手渡しはキャンディーズ、山口いづみ、原美登里。賞品は同じく七四年を例にとると、特等二本（カラーテレビ、ステレオ・セット）、一等二本（モーターバイク、八ミリ撮影機・映写機セット）、二等二本、三等五本、四等七本、五等一〇本、六等九〇本、七等一八〇本、八等一八〇本、九等一八

〇本、一〇等一八〇本の大盤振る舞い。これを一〇等からはじめ、二等から特賞になる頃には、一瞬の沈黙と喚声が入り乱れる。特賞に小型自動車が登場した年などは異様な興奮が走った。

そのほか、美佐賞として〇〇三三、〇三三番の抽籤券所持者にはチェコ製ウォーターセツト、クラシック型電話機が贈られ、一等二本の前後賞四本、特賞二本の前後賞四本も出された。大きくて持ち帰りのできない賞品は、取り敢えず目録を贈呈し、担当者が後日発送した。画家の谷内六郎と達子夫人が、三年連続して上位に当選したことがある。その三回目に九官鳥が当たり、いまなお健在で、逝くなった画家の癖のある口調を谷内家に響かせている。特賞、一等、美佐賞の賞品は、もちろん美佐が手渡す。抽籤の結果に一喜一憂する美佐の表情が、情景をより華やかにした。

例年、一〇月から紺野秘書課長を中心に総務部がバックアップして準備に入る。基本的な趣向やショーは制作部が立案した。阿木武史や網井雄三はいろんなプランを出して、「お祭り屋」の異名をとった。ちようどドリフターズが日劇に出演している頃で、そのナンバーを中心に構成することが多かった。模擬店に前年のヒット曲のタイトルをつけ、新人の場合にはその歌手が客にサービスした。たとえば、郷愁を誘うお汁粉のコーナーに『わたしの城下町』という看板を立て、小柳ルミ子が勧めるという具合である。

特筆すべきは、この直後に各係の責任者が自主的に会同して、「反省会」を持っていたことだろう。その意味では、一年がかりの準備をかけたパーティともいえる。ある年、たまたまこの会に顔を出した晋が言った。「業界のお客さん同志が交流するのではなく、わが社員もタレントの紹介など、積極的にアプローチしなさい」。いかにも晋らしいハッパのかけ方だが、ベテランはともかく、入社そうそうの社員たちは、目前の仕事で手いっぱいだったようだ。



踊る小柳ルミ子（右）、天地真理



新年会風景

晋と美佐を中心に、女性タレントが晴着姿で居並び、会場の入り口で来賓をにこやかに迎え、そして送った。「新年会」を業界屈指の人気パーティにしたのは、来客同士の便利さという以上に、当時の芸能界をそのまま絵にしたような、「華」の実感にあったのではないか。

春

渡辺プロの新社員にとって、いちばん切実な春の季語を選ぶとすれば、「春疾風」^{はるはやて}、「春一番」といったことになるだろう。

渡辺プロが、画期的な大学新卒者の定期採用をはじめたことはすでに述べた。採用決定と同時に彼らは現場でアルバイトをし、四月一日には基本的な業務をこなせるまでになっていた。一期生が面接試験だけときいて、フジテレビの梶山浩一が、「そりゃ、まずい。なんでもいから筆記もやらせなきゃ」と言った。彼はすぐ母校の東大へ駆けつけ、心理学の田中教室に飛び込んだ。取り敢えず目についた、田中A式アチーブメントテストの用紙を借り受け、これを一期生の筆記試験にした。問題が難しすぎ受験者は七転八倒した。のちに先輩たちから、「二期生は成績の悪い順にとったんだ」とからかわれた。

一年おいて二期生を採用。以後は毎年行われて、ついには新宿コマ劇場で会社説明会を開いたこともある。二回の面接で一般教養と英会話テストし、筆記は「無から有を生ずる」という作文を課した。三期生までは一期生と同じく現場教育主義だった。いちばん難しいのは、タレントのスケジュール管理で、いくつもの窓口から入ってくる仕事を統一しなければならぬ。若いマネージャーが集まって翌日の予定チェックをする。

スケジュールを取りすぎて、例えば新宿から池袋への移動時間、局から局への移動時間

を忘れるような初歩的なミスが、そこで発見される。ひどいときは同一時間帯に仕事がバッキングしている。突然の発病を含めて、そんな非常事態に備えるため「トラ帖」(エキストラ・リスト)を用意しているが、若い者同士の遠慮ない罵詈雑言はけたたましい。つい眼にあまったらしく、晋が「お前たち、坐禅でも組んで精神統一を図れ」と叱った。このひと言から、「新社員入社式」と「新人研修会」がはじまった。渡辺プロの春は、きびしい教育の季節になったのである。

入社式と新人研修会がワン・セットとして行われたのは、一九六五(昭和四〇)年の四期生からである。入社式のほうは辞令と社章の授与、社長訓話と簡潔にすませ、鎌倉・円覚寺へ三泊四日の坐禅研修に向かう。食事作法のきびしさと坐禅のつらさで、遠足気分などは吹き飛んでしまった。翌日は午前四時起床、四時半から坐禅。寒さと空腹で上体がふらつくと、すぐさま鋭い喝と警策^{けいさく}を浴びせられる。涙と鼻水をこらえているうちに、脚がガクガク震え出して首から背中^{けいさく}に痛みが走った。五時頃になると坐禅堂の外が朝日で明るみ、小鳥がさえずり出す。苦行に耐えている仲間たちの姿がぼんやりと視界に入り、どうやら落ち着いてくる。

清掃を終えたあとの庭の焚き火と、街の銭湯へゆくのがいちばんの楽しみだった。それでも最後の夜は、三時間の坐禅のあとにマラソンをした。精神的、肉体的な苦痛に耐え抜いたという自信が、足の運びを軽くしてくれた。

円覚寺側は最初、「芸能界はちよつと」と難色を示したが、いざ、はじまると総務部長・寺沢行信師と塚田周信師が、じつによく研修の世話をみてくれた。寺沢師が建長寺を経て、やがて埼玉県川口市の長徳寺を預かるようになると、研修の場も長徳寺に移った。その頃から、入試にも坐禅を組み込んだ。筆記と面接にパスした受験生を長徳寺に送り込む。総務部員も三日間一緒に合宿して、じっくり人物を観察する。この坐禅合宿に合格す



参禅研修会

れば、入社はぼ間違いないが、その強者たちも、入社後に改めて坐禅修行をやると思うとガツクリした表情になった、という。坐禅研修が終わると、山中湖畔の寮で精進落としをした。

いっぽう、「社員研修会」が春の行事として定着したのは七三年からである。翌年三月一五日から三日間、第二回研修会が箱根のホテル小涌園で開かれ、ここでパターンが確立した。その第二回についてみると、出席者は渡辺プロ各グループから一四〇名。

一、社員としての基本的姿勢の確認

二、日常業務の確認と今後の方針の確立

三、全渡辺グループの連帯意識の確認と高揚

を目的に、午前八時起床、洗面のあと直ちに体操。そして一日三回、延べ八時間にわたるミーティング、というハード・スケジュールだった。晋は「人間とは忘れっぽい動物だ。初心忘るべからず」という原点に立ち戻るのが、この研修会なんだ」と、位置づけをしていた。

社員研修会の前史として、六五年の四、五月に各グループごとに三次にわたった円覚寺研修会がはじまっている。新人研修会の直後である。同時に、所属の新人タレントに対して、音楽、演劇の幅広い知識を与える講習会が行われた。渡辺企画のスタジオで毎週火、木曜日の午前一一時半から一時間。演劇には浅田誠彦、宮田達男、竹内伸光、阿木翁助、テレビには石川甫、北川信、堀江史朗、音楽には藤井肇、チャリリー石黒が、それぞれ講師に起用された。

後者の講習会を、社員対象に練り直したのが七一年からの「国立寮研修ミーティング」で、七三年からは「研修セミナー」に改められた。目先の問題処理を離れて、新しい知識の吸収や、問題の総体的把握を学ぼうという趣旨で、社員のなかからセミナー委員が数名選ばれ、テーマと講師を決定した。社員研修会の狙いが自己開発に置かれていたのに対して、セミナーは知的学習が狙いだった。時期は一月から翌年三月まで。七三年度のテーマは「メディアに対する正しい理解」で、とくに関心の高かったテレビの回は、TBSから砂田実を講師に招いて活発な質疑応答が行われた。

社員研修会は、これら各研修会のメイン的催事として、箱根を中心には大磯ロングビーチに場所を移すなどして、社員錬成の場となりつづけた。

夏

研修の季節が終わって空を仰ぎみると、いつの間にか雲の峰が立っている。総務部から「海の家設営」の通知が回ってくると、気分はもう夏になってしまう。七三（昭和四八）年から二年間は伊豆の稲取、七五年から房総の館山に七、八月の二カ月間、民家を契約して社員に開放したのだ。若い社員には自炊も楽しく珍しい経験だった。

しかし、一方では夏の気配とともに忙しくなる社員もいた。新年会の設営と同じく秘書課を含めた総務部の人たちで、軽井沢で開催される「渡辺プロ・ゴルフ大会」の準備のためである。新年会と並んで、渡辺プロの二大行事として世間に知られてしまったから、寸毫のミスも許されない。

最初からゴルフ大会が企画されたわけではない。六一年の八月、渡辺プロは軽井沢スケート・センターで「真夏の夜の夢／サマー・フェスティバル」というショーを開いた。当時の軽井沢は、避暑の別荘族がひっそりとひと夏を過ごす場所、大衆的なリゾート地には程遠い。早くから軽井沢の開発に取り組んでいた西武グループは、若者をキャッチアッ



社員研修会

プする方途を探っていた。そのひとつの具体化が「真夏の夜の夢」で、第一回は頭角を現してきたクレイジー・キャッツが熱演した。

このとき、「せっかく軽井沢に行くんだから」と、山本紫朗など一五〇六人の外部スタッフを対象に「渡辺プロ杯ゴルフ大会」を開催した。これが好評を博して、来年からもやるうと継続が決まった。六三年からは前日に「美佐杯ゴルフ大会」が設定されて、美佐杯（八月第一土曜日）、渡辺プロ杯（翌日の日曜日）とつづいて、プロ杯の終わった夜が「真夏の夜の夢」となった。「真夏の夜の夢」は七五年で終了したが、ゴルフ大会のほうはより盛大になってつづく。晋の他界によって、第二七回が最後となった。

七五年は第一五回のゴルフ大会になる。その案内状は六月中旬に発送されているが、これをみると基本的なスタイルがわかる。

初夏を迎え、ますますご隆昌のこととお喜び申し上げます。

さて、今年もまた、渡辺プロゴルフ大会の季節が近づいて参りました。おかげさまで、本大会も今年で一五回になりました。

例年どおり軽井沢で開催いたしたいと思っておりますので、ご多忙中とは存じますが、避暑がてらおでかけ下さいますよう、ご案内申し上げます。

昭和五〇年六月一六日

渡 邊 晋
渡 邊 美 佐

日	時	時	時
八月三日 (日)	渡辺プロ杯	軽井沢72ゴルフ 西コース	八時スタート
八月二日 (土)	ビュッフエパーティ	晴山ホテル・大ホール	一九時〜二二時
	美佐杯	軽井沢ホテルゴルフ	一一時スタート

泊	晴山ホテル (TEL 軽井沢・〇二六七四―二二七六一) 大代表
宿	二日夜のパーティには当社のタレント多数出演の余興などを用意してございます。是非ご出席下さいますようお願い申し上げます。
御	

○ご招待は勝手ながらご本人ご一名様に限らせていただきます。

○宿泊料、ゴルフのグリーン・フィー、キャディ・フィーは当社で負担させていただきます。

○ハンディキャップは当大会ハンディキャップ委員会で決めさせていただきます。多少のご不満の点をご諒承下さいませ。

○今年もシニアティの準備をいたしております。

○詳細のスケジュールに関しては追ってご案内申し上げます。

○ご返事は六月三〇日(月)までに到着するようお送り下さい。



「真夏の夜の夢」ステージ

晴山ホテルが軽井沢プリンスホテル西館となつてからは（八六年）、この西館が宿泊、国際会議場・浅間がレセプションの会場となつた。コースは軽井沢72の東入山コースを使用した。すでに第一〇回（七〇年）の頃には、招待客は約二〇〇名。いずれも多忙な人たちなのに出席率は格段によく、いかに人気を集めていたかがわかる。出欠が明らかになると、五〇音順の出場者名簿を作成し、会社名、役職、生年月日、出身地、最終学歴、家族構成、趣味、ハンディ、備考を一覧できるようにした。備考欄には褒章、叙勲、特筆すべき業績、著書、団体役職などが記入されて、VIP接待が現場の末端にまで行き届くように配慮した。

第二二回（七二年）のスタッフは、総指揮、総合進行、ゴルフ進行係六名、来賓係五名、受付／部屋割り七名、タレント係一名、報道係二名、写真係二名、輸送係二名、ショー係九名、中継係四名、前夜祭係六名となっている。

同年の総合スケジュールは、以下の通り。

八月三日（木）午後四時、先発スタッフ集合、午後五時、出発準備にかかり、東京出発、深夜一二時、晴山ホテル到着。

八月四日（金）午前八時起床、優勝杯、成績表、スコアカードの準備。午前一〇時部屋割り、帽子、ネームプレート、タオルなどのセット作成とゴルフ場との打ち合わせ。正午、配車打ち合わせと食事券の準備。午後二時、美佐到着、組み合わせの変更、賞品点検。午後四時、VTRスタッフ到着。午後七時、翌日到着客の確認。午後一〇時就寝、但し深夜の到着客に備えて一名徹夜。

八月五日（土）午前六時起床、受付準備。午前八時、玄関に帽子などのセット運搬。午前一〇時、参加者の受付開始。午前一一時、晴山ゴルフ場へ移動。午前一一時三〇分、美佐杯スタート。午後一時、前夜祭パーティー準備。午後三時、パーティー、ショータイムのり

ハーサル。午後六時、パーティー受け、ついで高橋圭三の司会によるパーティー。午後九時三〇分、パーティー終了、美佐杯預り賞品の格納、翌日の打ち合わせ。

八月六日（日）午前四時起床、配車準備、セットなどの搬送。午前五時三〇分、72ゴルフ・クラブハウスの受付準備。午前七時、渡辺プロ杯参加者の受付開始、バイキング形式の朝食、午前八時、全三〇組がINとOUTの両コースから四班に別れて同時にスタート、スタッフは表彰式の準備。午後二時、ゴルフ終了。第二レストランで昼食。高橋圭三司会で表彰式。午後四時、表彰式終了、参加者のホテル輸送、ゴルフ場整理、帰宅者の送り出しと宿泊者のチェック。午後五時、「真夏の夜の夢」招待者の会場輸送、午後七時、「真夏の夜の夢」開演、午後九時三〇分終了。

八月七日（月）午前九時スタッフ朝食、午前一〇時、残余賞品やゲーム小道具などの積み込み、正午昼食、午後二時帰京。それから預り賞品の発送、成績表の作成と印刷、成績表を添えた参加者への挨拶状発送となる。

グリーン上の華やかな楽しさは、幾多のエピソードが随所に書き残されているが、裏方であるスタッフたちのこの周到な準備と作業は、ほとんど知られていないので、ここに記録した。初期の頃、準備に疲れたスタッフがロビーで仮眠をとっていると、ホテルのオーナーであり西武グループの総帥でもあった堤康次郎がはいつてきて、「この連中はなんだ」と雷を落としたことがある。

そのほか、INとOUTから四班に別れて同時スタートとあるが、これはINとOUTの一番と五番をスタートに使ったということで、普通のゴルフ大会ではみられない工夫である。もし三〇組が二班でスタートしたら、とても二時には終わらない。早く上がった組はクラブハウスで飲食するしかなく、最終組が上がってきたときには料理もなくなっている。堤義明の発案によるセミロケット方式と呼ばれるもので、いまでは大きなコンペでよ



前夜祭スナップ



前夜祭ご挨拶



見物席の佐藤栄作ご夫妻



「真夏の夜の夢」に出演するタレントたち



スタート前のご挨拶

く行われているが、それを他に先駆けて実行した積極性は、この大会の成功に寄与することであった、といわなければならない。

七一年秋からアポロンとW・Pが合同して、茅ヶ崎の名門コース、スリーハンドレッドで、有力販売店を対象にゴルフ・コンペを開催した。厳密に渡辺プロ方式を踏襲したところ、たちまち評判になって、販売業界ではもつともグレードの高いコンペとして名を上げた、という事実もある。

渡辺プロ杯、美佐杯の賞品は新年会なみにしたが、参加者たちも競って賞品を提供したから、トータルで見ると凄いことになった。

一例として第二六回（八六年）の渡辺プロ杯の優勝をみると、優勝カップと副賞のデンマーク製オーク材ドレッサーに、ソニー賞、サントリー賞、西武セゾングループ賞、博報堂賞、電通賞、フジテレビ賞、ラジオ日本賞、東京放送賞、ワコール賞、永谷園賞、味の素賞、ジャパンローヤルゼリー賞となっている。

賞品は第一〇〇位まで。これにブービー賞、ブービーメーカー賞、美佐賞（三三位）、美佐賞前後賞（三二・三四位）、ベスグロ賞、ニアピン賞、シニア優勝、シニア参加賞、レディース参加賞、フジテレビ並び賞、大波賞、ワコール・バーデイ賞、珍プレー賞が加わるのだから、手ぶらで帰る人のほうが少数派である。

盛田昭夫が突然の風邪で出席できなかつたとき、良子夫人が代理としてはじめて参加した。いきなり二位の好成績をあげたが、初参加なので第五位。その賞品がホンダのオートバイだったので仰天した、という。翌年から夫妻で参加するのを常としたが、不思議と賞に当たらない。前後を際どくかすめてゆくのである。業を煮やした盛田が「それなら、ハズれた人たちに盛田賞を出そう」ということになった。「洩れた賞」のもじりで、以後、盛田ハズレ賞として不運な参加者たちを慰め、喜ばせることになる。



スタート前の招待客たちと晋

「美佐杯のパーティのときから、蓋をあけた賞品が会場に展示されている。美佐ちゃんが出張などのとき、ヨーロッパでこつこつ買い集めたものが多いから、あちこちで「わあ、これが欲しい」だの、「あれを狙うわ」と声があがって、それは盛りあがったわね。たいていのゴルフ会は、賞品をデパートまかせにしてしまおうでしょ。渡辺プロの賞品はご夫妻が自分の眼で選んで、これは何等にしようかと夜遅くまでかかって決めるから、とても心がこもっていました。参加者が多くて、もつと賞品がほしいときは、軽井沢にあるソニー・プラザ店でも調達なさったけれど、ちゃんと正価で買ってくださっていたそうよ」と、盛田良子は回想する。

いわば、渡邊夫妻の体温のこもっている賞品だから、情まで移ってしまう。良子夫人が美佐杯第三位でもらったペア・ローブを、盛田家ではまだ愛用している。「五島昇さんのご一家はみなさん、ゴルフがお上手でしたから、五島一家は賞品を運ぶのにトラックが必要だなんてジョークが飛んで……。相沢英之さんがホール・イン・ワンを出されたときも大変な騒ぎになって、そんな楽しい情景ばかりでした」。

参加者は政財界の友人と業界関係者で、第二六回目のOUT第一組はハナ肇、盛田昭夫、諏訪博、佐治敬三、第二組は鈴木三郎助、相沢英之、牛尾治朗、原清、IN第一組は植木等、鹿内信隆、岡田茂、塚本幸一、第二組は松園尚巳、木暮剛平、後藤田正晴、高木一見と、錚々たる顔触れである。

六二年のゴルフ大会では、別荘に滞在中の佐藤栄作がプレーを楽しんだ。栄作の縁戚にあたるNHKの古賀竜二が誘ったら、気軽に腰を上げた、という。当時、野にあったとはいえ、佐藤が次期総理の最有力候補であることは周知の事実で、二年後にはそれが実現する。佐藤は上機嫌で高橋圭三らとコースをまわり、以後、晋・美佐と佐藤夫妻の交際が持たれた。

七三年のゴルフ大会には、前夜になって堤義明から連絡があり、田中角栄総理が姿を現した。堤のアドバイスで今里廣記、堤清二に美佐がついて回った。アドレスしたかと思うと打ってしまう。凄い早足で顔を拭きながらボールに追いつくと、あつという間につきのショット。噂以上にせかせかせしたゴルフだと、美佐はおかしかったが、ふと洩らした田中の一言が、美佐の笑顔を引き締めた。「毎日、一日に二ラウンド、プレーして疲れきらないと、夜、眠れないのだ」。美佐は胸を痛めた。

そのうち田中が、「梅干を食べたい」と言い出した。美佐は、その場で本部に繋がる無線を使った。たまたま紺野が出て、「えっ、梅干ですか」と絶句した。とにかくホテルの食堂で梅干は確保したが、これをどうしてコースに届けるかが難しかった。支配人が「後を追ったんじゃないだめだ。ジープを使いましょう」と言った。彼にとつても、ジープで芝生を走破して梅干を運ぶなど、はじめての経験だった。

紺野から美佐にジープの件を連絡し、美佐はそれを、同伴プレーヤーを装っているSPたちに伝えた。挙動不審のジープとみられては、どんな大事が起こるかもしれないからである。凸凹の芝生を疾走するジープに同乗しながら、紺野は改めて美佐の機敏な処置に舌を巻いた。

案内状にもあるように、ゴルフに参加できるのは招待者に限られたが、レセプション・パーティのほうは同伴者歓迎だった。夫人や令嬢がショーを楽しみにしていたし、ゴルフをしない軽井沢族も加わった。今日出海、柴田錬三郎、北条誠、石坂洋次郎、川口松太郎、源氏鶏太、生沢朗、水上勉など文化人のなかに、愛児を伴った谷内六郎の姿が際立って印象的だった。

とりわけ、美佐の交遊を軸に形成された才色兼備の一群は、あでやかな華をパーティに添えた。婦人たちはゴルフ・ウェアに凝った。パーティで撮影したスナップが、後日、参



田中角栄総理を出迎える美佐



にぎやかな表彰式



賞品展示

加者のもとに送られてくるが、それをみて盛田夫人は、「主人と私が二年つづけて同じウェアだった」ことに気づいた。それから盛田夫人は毎年、一月に保養へゆくハワイで、渡辺プロのゴルフ用にウェアをツー・ペア買って来た。「それを八月まで着ないで取っおくの」。

谷内未亡人は翌年のカレンダーが届くと、まっさきに八月第一週の土曜、日曜を丸印で囲んだ。「六郎はゴルフをしない人で、私たちのスタートを見送ってからホテルの部屋で仕事をしていたんです。でも、この軽井沢をとっても楽しみにしていました。私たち婦人部隊は、腕より着るもののほうが大切でした」と笑う。

渡辺プロ杯では、毎年、帽子がスコア・カードと一緒に配布される。ゴルフ・ウェアのお洒落はこの帽子の色に合わせるのがポイントだ。「渡辺プロは年ごとにテーマの色を変えるんです。そして、それはまず案内状の色でわかるんです。あ、今年はオレンジ・カラーだとか紫だとか……。盛田さん、今道さん、鹿内さんの奥様たちと、来年は何色かしら」なんて楽しみにしていました。

美佐はよく、「褒め合いましょうね」と声をかけた。「とくに着てるものを褒めるのが美佐さんのお上手で、つい嬉しくなってしまう」と谷内未亡人。そのお返しとばかり、パーティで美佐の挨拶がすむと、その出来ばえを婦人部隊が褒めちぎる。盛田夫人も「美佐ちゃんはお上手で、つい嬉しくなってしまう。皆さん、本日はお忙しいところを……」と、真面目で純な挨拶をするのがとてもチャーミングで、終わるとみんなで「マール」とか「よかった」とか、わいわい騒ぎました」という。

美佐はプレーをするより、カートに乗って激励にまわることが多かった。盛田夫人はこれが苦手で、「美佐ちゃんの顔をみると、私の調子が狂ってしまった。池にポチャン。あれは不思議でしたね。いまは彼女もよくゴルフをするし、スピーチもお上手になって、そ

れが却って渡辺プロ杯の頃を思い出させるよすがになるんです」。

盛田夫人はつづけて言う。「八七年から堤さんと五島さんが手を組まれて、72ゴルフで東急女子オープン（現在はNEC軽井沢72ゴルフトーナメント）をはじめられましたね。前日にプロ、アマ混合のイベントをやった話題になりました。私、あれは渡辺プロ杯の楽しさを継承したものだと思うんです。渡辺プロのゴルフとショーは、真夏の軽井沢の唯一のイベントで、それを復活させようとしたのが、あの女子プロ・トーナメントと切り切れると思います」。

現在、軽井沢プリンスホテルの営業担当支配人である小林清人も、「それは盛田さんのおっしゃるとおりです。政財界人がご参加なさるパーティなどは、渡辺プロ杯のノウハウをそのまま取り入れていますよ」と証言する。五八年に西武に入社した小林は、ごく初期からホテル側スタッフとして、このゴルフ杯と「真夏の夜の夢」にタッチしてきた。四月にミーティングをはじめ、六月に詰めを行い、七月に細部まで決定した。「参加されるVIPの顔触れは、他のコンペではみられないものでしたね。顔触れの豪華さは七月の日本生産性本部夏季セミナーと八月の渡辺プロ・ゴルフが双壁でした」という。

毎年が改善の積み重ねだった、と小林。「大掛りになればなるほど、社長ご夫妻の配慮が細くなってゆくんです。たとえば、渡辺プロからいい新人が出ますね。その新人は必ずといっていいほどゴルフ・コンペに顔をみせ、美佐さんがちゃんとフォローなさっていました」。

その小林に忘れられない思い出がある。彼は七八年、十和田プリンスホテルに転勤となった。そのとき、晋は手術後の静養に十和田プリンスを選び、ロビーで開口一番、「小林ちゃんはここにいたのか」と握手してくれた。この晋の温かさともまやかさは、谷内達子の胸裡にもまだ生きつづけている。それは、渡辺プロ杯最後のときだった。



プレー中の女性招待客たち



前夜祭の女性招待客たち

谷内夫人は、この日はハーフで切り上げ、ホテルへ引き上げようとしているところを晋に呼び止められた。「ボクも用があるから車で送ってゆきますよ。ちょっと冷やしラーメンでも食べてから行きましょう」。晋はごまだれを注文してくれた。「あら、社長さんは？」「いや、ぼくはいいの」。やがて運ばれてきた皿に飛んできた虫がはいった。晋はそれを持って奥にいき、新しいものと取り替えてきた。車はゴルフ場の裏の細い道を走った。高原の緑をみて「まるで東山魁夷さんの絵みたい」と感想を述べると、晋は「絵描きさんの奥さんらしいな」と言った。翌年、晋の訃報に接したとき、谷内夫人はこの日の晋のやさしさを思い出した、という。

「真夏の夜の夢」は会場のキャパシティが小さく、テレビ放映料でどうやら収支を合わせていた。それでもタレントを含めてショー関係者二〇〇名に食券を出した記載が残っているから、決して手抜きはしていなかったのである。小林らホテル側のスタッフもチケットを売った。夏の軽井沢は夕立が多く、そのたびに機材や客席に防水シートをかけ、保身に汗をかかなければならなかった。

七五年の最終回は沢田研二ショーをやった。72ゴルフコースの打ち放し練習場に、松の丸太を置き板を渡して椅子席とした。簡易トイレを設置し、露店の営業も認めた。付近は早朝から若者で溢れた。客席八〇〇〇のところは一五五〇〇〇人のファンが押し掛け、普段はゴルフ客しか知らない大井支配人を唖然とさせる。フィナーレは華麗にと火花を盛大に打ち上げたが、折からの濃霧に阻まれて、計算どおりの効果を得られなかった。しかし、スタッフはスケート・センターではできなかった演出を、この会場に詰め込んだのだった。

例年、軽井沢に出演したタレントたちは、来客の姿の散った月曜日の午前一〇時から、ゴルフを楽しんで帰った。それを見届けて、スタッフたちは「ああ、今年も無事に終わっ

た」と軽く杯を乾して、小林が一山越えた麓の安中まで送っていった。

その頃、晋は蓼科にある高橋圭三の別荘ではじめて寛いでいた。高橋もVIPの扱いに神経を使い、ことにハンディの決定と組み合わせに苦慮することが多かった。「もともと偉い人のゴルフは我儘なもんだからね」と、高橋は往時の苦勞を振り返る。高橋の情報をもとに晋と相談を重ね、それがハンディキャップ委員会に流されるのである。それだけに蓼科では、雀卓を囲んだり、ゴルフをしたり、白骨温泉に浸ったりと、気儘に日を送った。「あの短い蓼科滞在で、晋さんはほんとうに楽しそうな表情になった」と高橋は回想する。渡辺プロ杯の知られざる後日譚である。

渡辺プロの国立寮（国分寺市内藤二丁目四四番地一号）が完成したのは、七一年三月のことだった。社長邸の広尾への移転がきまり、上大崎の旧邸に寄宿していたタレントたちをどうするか、というところから発起された。武蔵野の雑木林に囲まれた高台の一角に、V字型のウイングを持つ白亜の瀟洒な三階建て。V字の中央に五角型の池をつくり、一階に防音レッスン室、談話室、応接室、食堂などパブリック・スペースを置き、二階に二人用寮室一二室、中三階に湯沸室、洗濯室、男女別洗面室、浴室、脱衣室、三階に二人用寮室一〇室、四人用寮室一室と、稽古事のできる和室一〇畳を配置した。

三月二日に晋・美佐をはじめ全社員が参加して完成パーティを開催し、四月からタレントが入居した。杉直人、発地伸夫が先陣で、六月に小柳ルミ子、江崎英子、河原田美登利、弓削洋子、山岡浩二、ハイスパンキーがつづき、にぎやかな寮生活が繰りひろげられる。高橋勇が寮長として一階に住み込み、親代りをつとめた。

高橋がいちばん留意したのは、周辺住人との交流だった。もともと国立は文化人の多い街で、そのせいかどうか、建設中からタレントを不良視するような傾向があった。そこで



国立寮

渡辺プロは、八月一五日の夜を「国立寮・盆おどり会」として近くの住民たちに開放した。V字を描いた二棟の延長線に添って、疎林を残した庭が扇形に拡がっている。そこに櫓をしつらえ、バンドを入れ、色とりどりの提灯をさげた。

せいぜい三〇〇人くらいかという予想を裏切って、約八〇〇人が集まってきた。寮生たちも浴衣姿で加わり、住民たちと一緒に模擬店の食べものを頬ばって、交歓、交流の一夜を過ごした。五年間つづけられたが、つねに五〇〇人程度が寄り合っただけ、新聞のローカル版に取り上げられたこともある。寮生たちがタレントとして育ち、多忙になってから中断したが、その頃には寮そのものが地域住民のなかに溶け込んでいた。

そのほか、この寮が社員研修の場として活用されたことは、すでに触れた。クリスマスには、在寮生が集まってパーティをひらいた。新派まがいの大悲劇を演じて、大笑いしてしまったことも。ナベプロ・タレントの青春の日々が、ここにあった。

社内行事として定着が困難なものもある。「社員旅行会」がその代表だろう。当初は晋・美佐の水泳好きが反映したのか、全員参加の旅行会が伊豆の今井浜、網代、千葉の御宿などへ、一泊で行われた。七一年にはグアムへ行った。六〇人ずつ三班に分けて飛行機に。はじめての海外旅行会とあって雰囲気は盛り上った。水遊びの合間を縫って観光バスを仕立て、奥地のジャングルもみた。凶暴なまでの緑と、むせかえるような暑熱に圧倒された。その翌年、グアムのジャングルからひとり残存日本兵、横井庄一が生還した。「あんなところで二五年も生きつづけていたのか」。社員たちは驚倒する思いだった。

このグアム旅行で、全員の社内旅行はひとまず終止符が打たれた。九四年、正月休暇に渡辺プロ全員がグアム旅行を楽しんだとき、古い社員たちは七一年の思い出を語って止まらなかった。通観して、温泉などの休息型よりスポーツ志向が強いのは、渡辺プロの旅行の

特徴といえるかもしれない。

秋

野にススキが白く光り、空に鰯雲が刷かれる時季になると、渡辺プロの社内がざわめいてくる。ただでさえスポーツ好きの社員たちが、近づいてくる「渡辺グループ野球大会」を待ちかねて、自慢の腕を撫しているのだ。

大学卒一期生、二期生の回顧には、深夜にボーリングを楽しみ、社長邸でミーティング、翌日の早朝に神宮外苑のグラウンドで野球をやり、ユニフォームのまま出社したという話が、よく出てくる。晋の野球好きも大きな要因になっただろう。晋は夏の甲子園高校野球のファンで、渡口関西事務所所長とアルプススタンドに並んで、カチ割り（氷の碎片）を手に数時間を過ごしていた。

社員の野球奨励には、多分にトレーニングの意味が含まれていたかもしれない。渡辺プロのグループ化とともに、対抗戦が発想されるのは自然の勢いで、一九六五（昭和四〇）年から春に社長杯争奪野球大会がスタートした。その三年後の六八年からは、秋に副社長杯争奪野球大会が始まり、年二回のイベントになったが、春の研修行事が固まるにつれ、秋の大会に一本化される。七二年秋の大会からA、Bの二リーグで勝ち上がり、両リーグの首位チームが決勝戦で雌雄を決することになった。八〇年代の社内報には「野球チーム選手名鑑」が掲載され、ベスト・メンバーや寸評までついているから、熱の入れ方がよくわかる。かつて甲子園球児だったタレントの高岡健二の活躍は、渡辺プロ球史の語り草になっている。

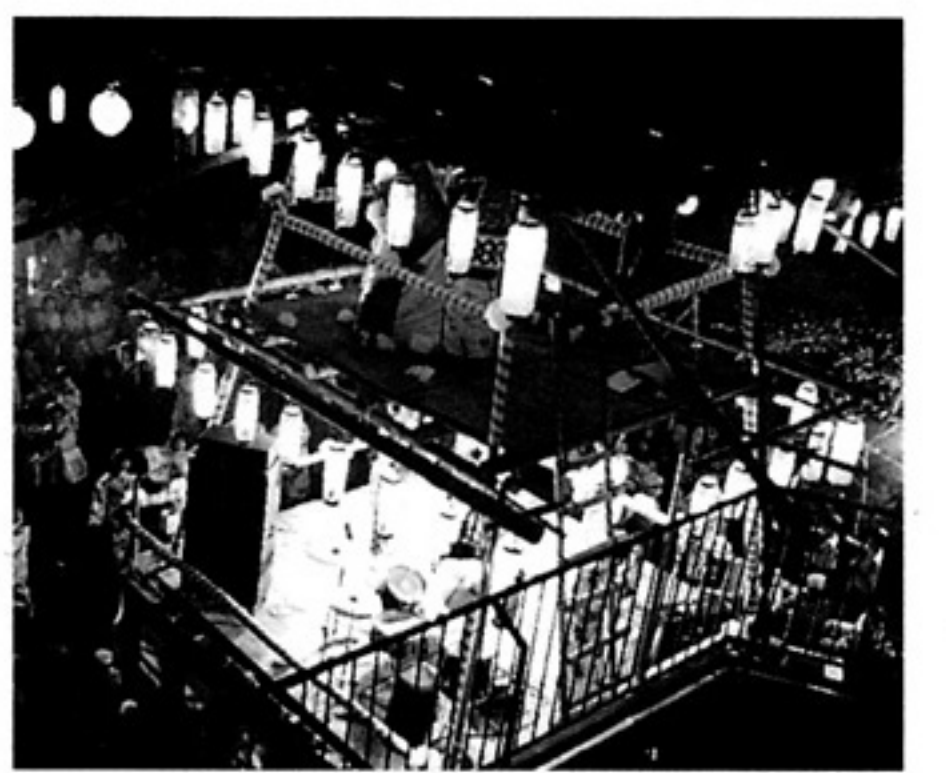
一〇月には、大学の新卒者を対象にした「入社試験」が実施される。その由来について



野球大会・表彰式



伊豆の社員旅行



盆踊り大会

はずでに触れた。ただ、バンド・ボーイや付き人からの社員採用は、随時行われた。なべおさみのタレントへの転進や、長谷川弘子のケースがこれにあたる。長谷川の場合、ザ・ピーナッツの付き人から、ザ・ピーナッツ、田代みどりの後援会を経て、六三年にスタートした渡辺プロ友の会の専従、美佐の秘書をつとめて九四年に定年退社した。美佐の過密なスケジュールを管理したとき、「あと何分で着替えを」と付き人時代の経験が役立つ、という。

九一年に、渡辺プロは採用の新方式を編み出した。学科試験を廃止し、全員に「私が挑戦したい仕事」というテーマの作文を課した。並行した第一次試験ではタレント・オーディションの審査をやらせ（才能にたいする眼力）、第二次試験で運動をやった（体力、チャレンジ精神、協調性、工夫力）。そして役員面接となる。全国の一四〇大学に、植木等をあしらった「日本一の夢責任大募集」というポスターとチラシを配布。さらに会社訪問の学生用に、松本明子を起用した会社案内ビデオを制作した。応募者は前年を上回って約三〇〇人。そのなかから五人を厳選して、彼らの成長ぶりを観察している。

必要な人材を得るためには、まず入社試験から冒險してみ、というのが、渡辺プロの採用試験を特徴づけている。

冬

霜が降り、落ち葉が舞い、凧が啼く季節になると、渡辺プロのタレントは眼の色が変わってくる。フジテレビの定番正月番組「新春スターかくし芸大会」の大本番が目睫に迫っているからだ。一九六四（昭和三九）年一月二日の『新春ポピュラー歌手かくし芸』が第一回で、ザ・ピーナッツ、クレイジー、三人娘たち渡辺プロ勢と、坂本九、九重佑三子た

ちマナセ・プロ勢を中心にした、単発のバラエティ番組であった。東軍のハナ肇が浪曲で迫ると、西軍の植木等が講談で対抗する。一二人の小学生が審査員をつとめた。晋とフジの村上七郎編成局長の間で、正月企画をつくることに話が一致して、梶山浩一、松下が現場を担当した。台本は塚田茂。これが好評で翌年から「新春かくし芸大会」へ。司会を高橋圭三が担当し、審査員もその道の権威筋に依頼した。六六年には四四・三%の視聴率を記録し、各局正月番組のトップを飾り、現在に至っている。九五年は第三二回を数え、日枝久フジテレビ社長は「この番組は永遠である」と表彰した。九七年の第三四回はフジの新社屋で収録された。

塚田は「新春かくし芸大会」を、晋がテレビ・バラエティ史に残した最大の足跡と評価し、フジが展開したバラエティ路線の中核的番組とみている。同じくフジと渡辺プロのユニット番組に、「スパークショー」（六二―六三年）というイベント型ショーがあった。森永製菓、電通、渡辺プロがジョイントしたエンゼル・キャンペーンの看板番組で、これは七三年からの「秋の紅白大運動会」（オールスター大運動会）の祖型となる。つまり、「かくし芸」と「大運動会」で、渡辺プロはオールスターによるテレビ・イベントを定着させたのだ。

「かくし芸」は第三回からVTRの抜き撮りが導入され、それに伴ってドラマやダンスなどが本格化する。タレントは本気で練習を重ね、最後の採点にも本気で泣き笑った。渡辺プロ側のプロデューサーは松下治夫から諸岡義明（西組）、和久井保（東組）とつづき、現在は諸岡が代表している。七月後半にキャスティング、一〇月に演目を決定して稽古にはいる。大本番は一二月最初の日曜日だ。

「こればかりは、タレントにやる気がないとどうにもならない。それに演目が十八本もあって、演目ごとに競争する。お互い秘密兵器を温存しているような雰囲気があって、そ



「かくし芸大会」大本番



会社案内

の間はタレントとスタッフの仲間意識がとても濃厚になる。『かくし芸』とは言っても、実質は真剣勝負」と、諸岡は言う。

それだけの努力をした上でのオールスター番組だから、とうぜんタレント自身も番組中の扱いには神経をとがらせる。しかし、渡辺プロは制作側でもあるから、自社のタレントに演出的、時間的なシワ寄せがゆくこともある。その不満をマネージャーがいかにかに説得するか。このような経験を通じて、渡辺プロらしいマネージャーとタレントの関係が形成されていった。タレントの交代がすんだ現在でも、中山秀征、松本明子が他社のタレントに気を使っている風景がみかけられる。

大本番のあと、晋、美佐が出席して制作スタッフの評価による表彰式と賞金授与を行う。最優秀賞をはじめ、近年は堺正章の活躍が眼をひく。そのあと、場所を食堂に移して打ち上げのパーティになる。民放切つての長寿番組は、夏からの長い制作スタッフとタレントの努力によつて支えられているのだ。

巷で忘年会が盛んになる一二月二〇日頃、社長邸では財界人たちの「歌う会」が開催される。「歌う会」は七三年、松園尚巳の発起ではじまった。会長・今里廣記、幹事長・松園尚巳、経理、司会・中山素平、会員として北野次登、佐治敬三、瀬川美能留、塚本幸一、徳間康快、本田宗一郎、盛田昭夫、山口比呂志、渡邊晋。財界の第一線がずらりと並んだ。晋は審査委員長を仰せつかった。母体となったのは銀座の文藝春秋別館ビル地下にあった「アムフィー・クラブ」の会員常連である。盛田と晋がここで将棋を指しているとき、「カラオケがないのが欠点だな」と言う話になって、カラオケ狂の松園が具体的なプランを練った。

最初の会則はきびしく、月一回の催しに、会員はレパートリー三曲を披露する。年に二回歌手を招いて勉強会を開く。年にいちど大会を開く。会費月二万円、欠席の場合のペナルティも二万円、とある。これは実現不可能で、実際に第一回が行われたのは七四年一月十八日である。会場は渡邊邸で、松根宗一アラスカ石油会長、島田喜仁石油開発公団総裁をゲストに、中山、今里をメインにして、「新年懇親歌始めの会」と名目をつけた。ちょうど石油資源が大きな社会問題になっていた。これが、財界の年末定番となったのは同じく七四年一月二七日からである。その案内状が残っている。

第二回「歌う会」のご案内

この一月、資源問題でご苦労されている中山素平、今里廣記両氏をご慰労しようと、友人の渡邊晋氏をわずらわし、同家で「歌う会」を開催、盛会をきわめました。只今、両氏とも外遊中ですが、ご出発前ぜひ年内に第二回の「歌う会」を開催して欲しいと今里先輩より強い意向がありました。

場所もいろいろ考えましたが、伴奏楽器その他を考え、再び渡邊晋氏宅で行うよう次のとおり計画いたしました。年末ご多端のことと存じますが、ぜひご出席の労を賜りたく、お願い申し上げます。

敬具

幹事 松園尚巳

文中に「伴奏楽器その他を考え」とあるとおり、宮川泰や猪俣公章、平尾昌章らが伴奏をした。小柳ルミ子や天地真理が出席したこともある。渡邊邸で会則にある大会と勉強会



「歌う会」での中川一郎氏



歌う会 (第7回)

を、併せて挙行したような形になった。メンバーは一気に増加し、政治家も加わってきた。審査委員長の晋は、駄洒落まじりの賞を連発した。「歌いこんでるで賞」「進歩したで賞」「さわやかで賞」「新鮮で賞」「相変らずで賞」はその一端。天下に音痴の雄名を馳せた三鬼陽之助は、レパートリーが「カスバの女」一曲しかなかった。ある年、今里廣記がその『カスバの女』を三鬼より前に歌ったので、三鬼は「オレはもう歌わんぞ」とへそを曲げてしまった。このとき、晋と高橋が三鬼をなだめたセリフは、末長く財界人の記憶に残った。「まあ、まあ。芸能界には真打ちというものがあるから……」。

「歌う会」は八三年まで一回つづいた。事務局格をつとめたのは渡辺プロ秘書課で、肩書きの変更が多い政界人、財界人たちに失礼のないよう、表に出ない苦労が多かった。第一回は二三名が出席し、高橋圭三が司会、遠藤実、宮川泰がコーチ、森岡賢一郎たちが伴奏をつとめた。もちろん歌が好きということもあるが、それ以上に責任の重い政財界の「戦士」として、迂闊にできない一年間の憂さ晴らしを、渡辺邸では伸び伸びと発散できたことが、彼らの大きな憩いとなったのだろう。タカ派といわれている人が反戦歌を歌ったり、ハト派の人が軍歌を歌ったりする。高橋は八三年、『星影のワルツ』を涙ながらに歌った中川一郎の姿が忘れられないという。その一〇日後に、中川は札幌で開かれた後援会の新年パーティに出席したあと自裁するのである。「自民党総裁選で敗れて、中川さんは心身ともにボロボロだった。渡辺邸で泣きながら歌ったときは、すでに覚悟していたのでしよう。ほんとの姿をさらけ出していたんですね」。

晋と政財界の間には、なんの利害もなかった。晋が彼らに望んだのは、芸能ビジネスの実態を知ってもらうことだった。晋は時間をかけ、芸能ビジネスから情報ソフト産業、そして企業文化の重要さを、彼らに理解してもらおうとした。それも頭での理解ではなく、「歌う会」や「新年会」「ゴルフ大会」を通じて、肌で理解してもらおうとした。

晋と美佐の人柄も、ある意味では孤独な政財界人の心を開かせた。そして、夫妻の口の堅さは「自分の身内にも洩らさない」と、盛田夫人が驚嘆するほどのものである。要するに、大きな信頼感と対等の友情が芽生えたのである。岩堀喜之助や晋・美佐の政財界との交流を、木滑良久は「利益や便宜の見返りを期待してのことではなかった。岩堀や晋さんたちが業界の頂点に立ったとき、誰にも言えない孤独感や淋しさを感じたのはまちがいない。そのとき、彼らや彼女たちにも政界や財界トップの孤独感が見えたんだろうと思う」と語っている。美佐も「偉い人たちがふっとみせる淋しさ、それに耐えている姿に私は打たれた。慰めてあげたいという気持ちに突き動かされた」と証言している。

大晦日の夜、晋と美佐はなるべく自宅で「紅白歌合戦」と「日本レコード大賞」（六九年から一二月三日の放映）をみるようにしていた。六七年の「レコード大賞」では大賞、歌唱賞、作詞賞、作曲賞二、合計五つの渡辺プロ関係の受賞があり、七四年の「紅白歌合戦」には一組の渡辺プロのタレントが出場した。夫妻はそれを、むしろクールな眼で、この一年間を再検討するかのよう眺めていた。同時に、滅多に持てない冬籠りの感触を楽しんでもいた。

その番組に出演していたタレントやマネージャーたちが、報告と年末の挨拶をかねて、社長邸に集まってくる。大晦日独特の安堵感を伴った、温かいひとときが社長夫妻を囲んで流れてゆく。除夜の鐘が意外な近さで聴えてきた。

去年今年 ひと筋に火は 燃えつづけ 朱鳥

この章で取り上げた諸催事が、渡辺プロにとってどんな意味を持っていたか。それを要約しておこう。



社長宅で「紅白」のビデオを見る出演スターたち

第一は、催事という多分に儀礼を含む諸行事の実施を通じて、社員に独自の躰（学習）を与え、それが独自の社風を生んだこと。その延長として、渡辺プロという企業の文化が練り上げられた。

第二は、来賓に楽しんでもらうという至上の目的に添って、社員がエンターテインメント・ビジネスの神髄と機微に熟知していったこと。渡辺プロの人を楽しませる技術の体系は、ほとんど完全主義に近いところまで到達した。

第三は、諸行事を直接担当した総務部、経理部、秘書課などの管理部門スタッフが、修羅場をくぐり抜けたことで実戦的な体質を持つに至ったこと。演出面などでは制作部の協力を得たが、その協同作業を通じて、管理部門も制作部門の現場を実感した。企業規模の拡大は、しばしば、現場を知らない官僚的管理部門の肥大化を招くが、渡辺プロにはそれがなかった。

これらの諸点が、催事実施の特筆すべき効果だったと思われる。